

# 英語談話標識を再考する

廣瀬 浩三

## 0. はじめに

廣瀬 (2012) において、談話標識についてのこれまでの主だった研究アプローチを振り返り、談話標識を分析するにあたってどのような観点から眺めればよいのか、20 の観点を示した。この談話標識研究の難しさは、そもそもどのような言語表現を談話標識として扱い、その意味機能をどのように捉えていくのかといった基本的な問題についてコンセンサスがなく、個々の研究者によって異なる立場から、その一般化が図られてきたことにある。

本稿では、廣瀬 (2012) を補う形で、再び談話標識研究の原点に戻って、談話標識をどのように捉え、分析していけばよいのかを再考したい。

## 1. 談話標識の文法的な位置づけ

まず、英語談話標識を理解していくために、その文法的な位置づけについて議論し、それらがどのような特徴を持ち、実際にどのようなレベルで機能するのかといった、談話標識に関する基本的な考え方を整理しておきたい。

### 1.1 英語学習者の立場から見た談話標識—Swan(2005)

談話標識の定義、そして、その定めた定義からどのような語句や表現が含まれるのかについては学者によって意見が分かるところである。英語学習者の立場からは、以下の Swan(2005:138) の記述がもっとも分かりやすい。

Discourse means 'pieces of language longer than a sentence'. Some words and expressions are used to show how discourse is constructed. They can show the connection between what a speaker is saying and what has already been said or what is going to be said; they can help to make clear the structure of what is being said; they can indicate what speakers think about what they are saying or what others have said. There are a very large number of these 'discourse markers', and it is impossible to give a complete list in a few pages. Here are a few of the most common examples. Some of these words and expressions have more than one use; for more information, look in a good dictionary. Some discourse markers are used mostly in informal speech or writing; others are more common in a formal style. Note that a discourse marker usually comes at the beginning of a clause. (Swan, 2005:138)

Swan(2005) の記述を少し追っていくと、まず、「談話」に関しては、「文より長い言語の断片」とし、談話標識は、その談話がいかに構成されているかを示す語や表現としている。そして、その主な働きとして、「話し手が今述べていることとすでに述べたこと、あるいは、こ

れからのべようとすることの結びつきを示す」, 「述べられていることの構成を明確にする手助けとなる」, あるいは, 「話し手が自らの述べていることや他の人が述べたことに対して, どのように思っているのかを示す」ものであると述べている。さらに, くれた話し言葉と書き言葉で好まれるものと, もっぱら書き言葉で用いられるものがあり, 現れる位置としては, 通常, 文頭に来ることも指摘されている。

同時に, 非常に数多くの談話標識が存在し, その中には二つ以上の用法を持っているものも存在することが指摘され, すべてを記述することの難しさが示唆されている。

Swan(2005)では, こうした解説の後に談話標識を21に機能分類して, かなり詳細に個々の談話標識の用法が記述されている。網羅的ではないが, そこで取り上げられた項目をアルファベティカルに並べると, 以下の語や表現が見受けられる。

*actually, after all, also, anyway, at least, by the way, frankly, furthermore, however, I mean, in addition, incidentally, in conclusion, in fact, in other words, kind[sort] of, look (here), mind you, nevertheless, now, of course, OK, on the contrary, on the other hand, (all) right, so, still, then, therefore, well, you know, etc.*

このように, 談話標識には, 一見して雑多な語や表現が含まれ, 上記のSwan(2005)で分かりやすくその主だった働きが述べられているものの, 談話標識を一つのカテゴリーで捉えることはなかなか難しいように思われる。談話標識の捉え方を示す前に, 以下, 談話標識の一般的特徴について, 具体例を添えながら, 簡単にまとめておこう。

## 1.2 談話標識の一般的特徴

### 1.2.1 語彙的・音韻的な特徴

語彙的な特徴としては, 上記のSwan(2005)の挙げた例からも明らかなように, 雑多な品詞から構成されるということが挙げられる。以下, 品詞別に再整理しておこう。

- (1) a. 副詞 : *actually, also, anyway, frankly, furthermore, however, incidentally kind [sort] of, nevertheless, now, still, then, therefore*<sup>1</sup>
- b. 前置詞句 : *after all, at least, by the way, in addition, in conclusion, in fact, in other words, of course, on the contrary, on the other hand,*
- c. 間投詞 : *well*
- d. 接続詞 : *so*
- e. 動詞 : *look (here),*
- f. 形容詞 : *OK, (all) right*
- g. レキシカルフレーズ : *I mean, mind you, you know,*

この他, 文字通り「訂正」と述べることで, 自らの言葉の訂正を合図する *correction* や,

相手に有無を言わせない形で「以上， 終わり」と言い切る *period* など名詞から派生した談話標識も見いだせる。前者については， (2a) のように， 自らの発言の中で用いられることが多いが， (2b) のように， 相手の発言を訂正する場合にも用いられる。また， 後者について少し補足すると， (3a) のように前言を要約して言い切る形や， (3b) のように， 否定を繰り返して強調するような場合に用いられることが多い。

- (2) a. I feel so terrible. *Correction*, I feel nothing. Which is worse.—E. Segal, *Oliver’s Story*  
 b. “You still have a chance to enjoy the relationship.” “*Correction*. She has a chance to enjoy the relationship. I’m not sure I would.” —S. Grafton, “*J*” *Is For Judgment*
- (3) a. “He is a little dog but a lot of people won’t break into a place if there’s a dog, no matter what size it is. They’re just scared of dogs, *period*.” —L. Block, *A Walk Among the Tombstones*  
 b. “He never served,” I said. “He was never in Vietnam?” “He was never in the service, *period*.” —L. Block, *A Long Line of Dead Men*

音声的な特徴としては， 談話標識は， その表す意味機能と呼応して， 通例， 談話標識自体で一つの音調単位を形成し， コンマを伴って発話される。そして， その抑揚によって様々な含意を伴うのである。その最も分かりやすい例として， 談話標識が単独で用いられる場合を見てみよう。例えば， *well* は， 以下のように， 同じ単独で用いられたにしても， 音調によって異なる態度表明や感情表出の標識となる。(4a) では， 下降調で発話され， 驚きが表示され， (4b) のように上昇調で発話されると， 一般に， 相手に情報を求めることになる。やや複雑な， 上昇-下降-上昇調となる (4c) では， 優柔不断さや自信のなさが表される。また， 上昇-下降調の (4d) では， 譲歩的な響きやためらいの響きを伴うことになる。

- (4) a. [someone has just left the room after losing their temper] *Well*. [Fall intonation] (Blakemore, 2002:132)  
 b. *Well*...? [Rise intonation] Interrogative: “What do you want? What have you got to say?” (Ball, 1986:117-118)  
 c. *Well*... [Rise-fall-rise intonation] Indecision: “I’m not sure. Maybe.” (Ball, 1986:117)  
 d. *Well*... [Rise-fall intonation] Concession, often reluctant: “You may be right, but...” (Ball, 1986:118)

### 1.2.2 統語的な特徴

談話標識が現れる典型的な位置は， 文頭であるが， 同じ談話標識が， 文中及び文尾にも現れることがある。例えば， 次の「何と云っても， つまるところ， だって」の意で， 理由付けを示す *after all* は， 通例文頭で用いられるが， 文中や文尾にも現れる。一般に， 文中では，

前後の要素に焦点を当てる場合が多く、文尾は、追加陳述的に、念押しや留保条件を添える位置となっている。

具体例で見ると、*be* 動詞の前後に来る場合、(5a)では、補語の位置に来る名詞句が強調され、(5b)では、主語が取立てられ、主語を浮き彫りにして、その後の叙述が続けられている。(5c)の場合も、前文を受け、主語の部分に焦点が当たっている。(5d)のように、目的語の前に割って入る例はまれであるが、この文脈では、“a criminal record”に焦点を当てていると考えられる。後続している挿入句的な“what they call”にも注意されたい。

- (5) a. She didn't apologize for being late. She was, *after all*, a professor, and I was a gumshoe.  
—R. Parker, *Hush Money*
- b. As someone pointed out, you might as well take the whole business a day at a time. That, *after all*, is how the world hands it to you.—L. Block, *A Walk Among the Tombstones*
- c. “Isn't it possible that there Priority embers were murdered by someone outside the church? Someone who didn't understand what the Grail really is? The Cup of Christ, *after all*, would be quite an enticing treasure. Certainly treasure hunters have killed for less.” —D. Brown, *The Da Vinci Code*
- d. Admittedly, it's not the most closely held secret in the world. I have, *after all*, what they call a criminal record, and if it weren't a matter of record they'd call it something else.  
—L. Block, *The Burglar Who Thought He Was Bogart*

文尾に現れた(6a)や(6b)では、付加疑問文的に、「だってそうでしょ」と自分の陳述の念押しや相手に何か行動を促す場合の強化を図っている。(6c)では、理由付けが先に来て、相手の質問に答えているが、*after all*を付すことにより、その理由付けが当然のこととして受け入れてもらった上で、自分に都合のよい答えをしようとしている。<sup>2</sup>

- (6) a. “Not you,” she said at last. “But Gina Belfante did kill him, *after all*.” —R. Patterson, *Silent Witness*
- b. “Come in! Come in and let me pour you a drink. It is cocktail hour, *after all*.” “Well, just a very little Scotch. I'm on duty, and I'm beginnin' to think—” —W. Harrington, *The Game Show Killer*
- c. “When can you have it ready, Harry?” “Well...Day after tomorrow is Christmas, *after all*. My son and his wife will be here, with their children, some of the time. What do you say to Monday?” —W. Harrison, *Columbo: The Hoover Files*

さらに、Kay(1997)では、*sort of* [*sorta*] や *kind of* [*kinda*] の統語的特徴が指摘されており、様々な構成要素を修飾し、その修飾する要素によって、文中の様々な位置に現れる観察を

行っている。

- (7) a. Crete is *sort of* an island.  
b. All the papers were *kinda* really interesting.  
c. I *kinda* have to get going now—because I have to pick up my car at 5:00.  
d. Those of us who grew up in the extremely *sort of* comforting days of linguists...  
e. He does very *sort of* creative things with language and literacy.  
f. He distributed the grapes *sort of* amongst the mangoes.  
g. She did it very *kinda* unfalteringly. I was wondering *sorta* how many of the people he thought he could fool how much of the time...

(以上, Kay, 1997:146-147)

次の例のように、追加陳述的に文全体を修飾する場合に、文尾にくることもある。ただし、文頭の位置に現れるのは通例不可となる。<sup>3</sup>

- (8) a. But she was crying. He kept waiting. At last the crying stopped, *sort of*.—Ed McBain, *Mischief*  
b. “Oh, Meg, you’re so liberated.” “Of course I am, I always have been, *sort of*.” —A. Adams, *Super Women*
- (9) \**Kinda* John passed the exam. (Kay, 1997:148)

また、文の種類と談話標識の関係について述べると、個々の談話標識によって異なるが、様々な文の種類と共起する。一例を挙げると、*oh* や *so* は、「肯定+肯定」、あるいは「否定+否定」の付加疑問文としばしば共起し、*so* を伴う (10a,b) では、推論によってある結論に到達したことが表され、*oh* を伴う場合には、新しい事実に対する驚きを表す。付加疑問の部分、典型的に、上昇調のイントネーションを伴い、全体として、皮肉を込めた疑いを示唆する表現となる。(cf. Greenbaum & Quirk, 1990:235)<sup>4</sup> このように、談話標識と文形式が相乗効果的に機能し、特定の談話標識が好まれる文形式が存在する。研究課題としては、逆に、ある特定の談話標識がどのような文の種類と共起しないのかといったことも興味深い。

- (10) a. *So* you’ve lost your job, did you?—*OALD*<sup>3</sup>  
b. *So* that’s your little, game, is it?—Greenbaum & Quirk (1990)  
c. I borrowed your car. *Oh*, you did, did you?—Thomson & Martinet (1986)  
d. I didn’t think you’d need it. *Oh*, you didn’t, didn’t you?—*ibid.*

談話標識は、さらに単独で機能する場合もしばしばあり、疑問文の応答や相手に発話を

促す表現などで頻繁に用いられる。以下、本稿では、後者の相手に発話を促す表現について少し詳しく見ていこう。

まず、接続詞が副詞化して、単独で用いられる例を挙げておきたい。頻度的には、*and* と *so* の使用が多く、*and* の場合には、さらに、(11b, c) のように、*then* や *that is* が続き、時間的経過や言い換えを求めたり、何らかの方向づけをしながら相手から情報を引き出すとする表現が見受けられる。また、*so* の場合には、単独の *so* と共に、(12b) のように、「それがどうしたんだ」と詰め寄る *So what?* もしばしば用いられる。(12b) では、*So?* との使い分けにも注意されたい。<sup>5</sup>

- (11) a. “She claims to be James’s lover. According to her, James asked her to go with him to California.” The sentence had an incomplete sound. “*And?*” —R. Patterson, *The Final Judgment*
- b. “He said he’d dig up Angela Richard’s file and I promised him lunch at Lucy’s.” “*And then?*” “And then we’ll see.” —R. Parker, *Thin Air*
- c. “Meanwhile, there’s a ready solution to the problem out here.” “*And that is?*” — E. Segal, *Only Love*
- (12) a. “And that just minute the goddamn door opened and he shot her.” “*So?*” “So I think he was firing at *me*. I think he opened that door and let loose thinking he’d be shooting me. Killing *me*.” —Ed McBain, *Mischief*
- b. “It’s just a hunch,” I said, “and I could be completely wrong. And I haven’t worked it all out in my mind yet.” “*So what?*” Bern, there’s nobody in the room but you and me. Nobody’s gonna sue you for slander.” “I know.” “*So?*” —L. Block, *The Burglar in the Library*

このほか、(13)、(14) のように、*but* や *because* のような接続詞もしばしば単独でも用いられ、副詞化している。<sup>6</sup> それぞれ、(11b)、(12a) と同様に、後続する発話が、相手の発話を引き継ぐ形で、指定された接続詞から始めていることにされたい。

- (13) “I came out wanting to believe him...” “*But?*” “*But* he couldn’t give me any corroborating evidence.” —R. Patterson, *The Final Judgment*
- (14) “We had to ask for Tom’s resignation,” Hathaway said. “*Because?*” “*Because* his loyalty was in question.” —R. Parker, *Night Passages*

さらに、具体例を求める (15) のような *such as* や、くだけた言い方で好まれる *like* の例も多く用いられる。*like* の場合は、(16 b, c, d) のように、さらに疑問詞が添えられたバリエーションが見られる。

- (15) a. “There are a lot of peripheral pressures.” “*Such as?*” —P. Cornwell, *Post-Mortem*  
 b. “And what do you want?” “Something different.” “*Such as?*” —R. Parker, *Promised Land*
- (16) a. “They say he’s got a fairly brilliant collection for himself, but mostly he buys for friends. I mean for big collectors, honey. Big big big shits.” “*Like?*” —G. Green, *The Juror*  
 b. “It has its advantages,” she replied a little unconvincingly. “*Like what?*” pressed Max. —J. Archer, *To Cut a Long Story Short*  
 c. “My father got on her nerves.” “*Like how?*” “Like, I don’t know. He was always grabbing at her, you know. Patting her ass, or saying gimme a kiss when she was trying to vacuum. The kind of stuff. She didn’t like it.” —R. Parker, *Promised Land*  
 d. “You, for instance, are very contained.” “And there are moments when you are not.” “*Like when?*” I said around the bite.—R. Parker, *Thin Air*

例示を求める以下の前置詞句も同様に単独で現れる。

- (17) a. “Who told me?” “Who told you. Everyone.” “*For example?*” —G. Green, *The Juror*  
 b. “Something wrong?” “Everything.” “*For instance?*” —E. Segal, *Oliver’s Story*

(18a, b) のように、言い替えを求める前置詞句や副詞も単独で現れ、相手から情報を引き出す表現として機能する。

- (18) a. “You want to apprehend him without involving the media and the police. I get the feeling you’d like to see sentence passed and carried out in much the same manner.” “*In other words?*” —L. Block, *A Long Line of Dead Men*  
 b. “There could be an alternative scenario,” said Jackson quietly. “*Namely?*” —J. Archer, *The Eleventh Commandment*

最後のグループとして、応答表現によく用いられる間投詞がある。yes や no, oh, well, huh など、いずれも上昇調のイントネーションで、相手から確認情報やさらに新しい情報を引き出そうとする場合に用いられる。<sup>7</sup>

- (19) a. “Are you Melissa Lowndes?” “Yes?” “Follow me, please,” he said. —E. McBain, *Mary, Mary*  
 b. “Or maybe he was already dead from the blow to the head. Or maybe—” “Yes?” —L. Block, *The Burglar in the Library*
- (20) a. “Welcome home, Angel.” She shook her head. Maybe first I can try reason, she thought.

Even silently spoken, her speech sounded shaky inside her head. “No?” he said. —R. Parker, *Thin Air*

b. “But I never said a word to her. Then, ever.” “No?” “No. Why give her satisfaction?” —R. Patterson, *The Final Judgment*

(21) a. “Did you fight each other in this preliminary bout?” Susan said. “Yeah.” I said. “Well?” Susan said. “Well what?” I said.—R. Parker, *Pastime*

b. “Then what is it?” “Let’s say it’s conflict of interest.” “Oh?” —E. McBain, *Mary, Mary*

c. “I mean the writer.” “Huh?” —E. McBain, *Mischief*

以上、発話を促す談話標識を少し詳しく例証したが、これらについても各文脈における使い分けがあり、さらに一歩踏み込んで分析する必要がある。<sup>8</sup>

### 1.2.3 意味的な特徴

談話標識の意味的な特徴としては、文字通りの豊かな語彙的意味をとどめているものと、語彙の意味が薄れた文脈的な機能が前面に出てくる談話標識がある。一つの談話標識にくつの意味を認めるか、あるいは、それぞれの意味がどのように関連しあっているのか、検討すべき点が多い。1.5で、こうした談話標識の意味の考え方についてまとめておきたい。

### 1.2.4 機能的な特徴

一つの談話標識は様々な機能を果たす。また、ある文脈に生じた談話標識が複数の機能を果たしている場合もある。上記の意味的な特徴と同様に、談話標識の機能的特徴の追及は、談話標識研究の中心的課題である。談話標識の機能について詳しくは、1.6を参照されたい。

### 1.2.5 社会的・文体的な特徴

談話標識は、社会言語学で言う言語使用域 (register) の特徴が見いだせる。スタイルとの関係について言えば、くだけた話し言葉に生じることが最も多いが、逆に、もっぱら堅苦しい書き言葉に用いられるものもある。例えば、次の *thus* は、もっぱら書き言葉に限られ、特に学術的な文献でよく用いられる。しかし、同じ書き言葉でも、下記のように、ペーパーバックなどの一般向けの小説で用いられる頻度は低い。

(22) a. However, because California Fidelity had recently chalked up such big loses, Maclin Voorhies, the company vice president, was taking a dim view of rubber stamping. *Thus*, the matter had been referred to me as for follow-up.—S. Grafton, “*H*” *Is For Homicide*

b. Come on, Gilbert,” Dickie continued, “the Puddling’s not *that* liberal. I mean, we’ve still got to keep somebody out.” *Thus*, even on the night of such personal triumph, Jason Gilbert was once again reminded that although all Harvard undergraduates are equal, some are more equal than others. —E. Segal, *The Class*



こうした言語使用域の相違は、最近のコーパス言語学の発展によって、量的にも明示化されてきた。Biber, *et al.* (1999) からその研究成果の一端を紹介しておきたい。会話と学術的な文章に生じる談話標識の分布やアメリカ英語とイギリス英語における相違、さらに、類義的な意味を表す談話標識のスタイル上の違いをまとめている。個人によるスタイル上の好みといったものも存在し、その特徴づけもなかなか難しい。

(23) Most common linking adverbials in conversation and academic prose

- Four linking adverbials are especially common in conversations. Two of these mark result/inference: *so* and *then*. The other two mark contrast/concession: *anyway* and *though*
- *AmE* conversations differs from *BrE* in having a higher frequency of *so* and a lower frequency of *then*.
- Academic prose does not have any linking adverbials occurring frequently as *so* and *then* in conversation, but several linking adverbials occur with notable frequencies: *however*, *thus*, *therefore*, and *for example*.

(以上, Biber, et al. 1999:886)

(24) Stylistic preferences for linking adverbials

- *Hence*, *therefore*, and *thus* show marked distributions in their use across texts:
  - Most occurrences of *hence* (over 70%) are in a few academic texts (c. one fifth of all academic prose texts).
  - Most academic texts show a clear preference for either *thus* or *therefore*, usually using one choice at least twice as often as the other.
- *For example* is by far the most common appositional linking adverbial in academic prose, but the use for *for instance* and *e.g.* varies by text:
  - Most occurrences of *e.g.* (over 80%) are in a few academic texts(c. one fifth of all academic prose texts)
  - Most occurrences of *for instance* (over 60%) are also in a few academic texts (c. one tenth of all academic prose texts).

(以上, Biber, et al. 1999:889)

また、イギリス語法とアメリカ語法で頻度が異なる談話標識や、その他の英語圏で頻繁に用いられる談話標識も存在する。次の *mind(you)* は、イギリス語法に多く用いられ (cf. Schourup, 1985:107, Bell, 2009:915), 付加疑問文的に添えられる *eh* は、イギリス英語、さらにカナダ英語やニュージーランド英語として特徴づけられる。<sup>9</sup> しかし、両者ともアメリカ英語においてもかなり広く用いられ、英語学習者向けの辞書では、後者については、*BrE informal* としているイギリス系の辞書もあるが (*LDCE*<sup>5</sup>, *OALD*<sup>7</sup>), アメリカ系の辞書では、*informal*, *spoken* 等のラベルはつけられているが、地域的な差を認めているものは少ない。

(cf. LAAD, RHWDAE) 以下, アメリカ英語の小説から実例を挙げておきたい。

- (25) a. “A number of acquaintances have been called as witnesses,” he tells us. “*Mind you*, I don’t know what they were asked, or what they might have said under oath.” —S. Martin, *The Judge*
- b. “You’re right,” I said. “There’s a definite resemblance.” “Not that he’s the splitting image, *mind you*, but—” “But there’s a resemblance.” —L. Block, *A Dance at the Slaughterhouse*
- (26) a. The colonel cleared his throat. “Well, we’re to take your word for that, *eh*, sir?—L. Block, *The Burglar In The Library*
- b. “I don’t know, I was watching two or three of them at once.” “Channel surfing, *eh*? A popular indoor sort.” —L. Block, *Even the Wicked*

さらに, 談話標識の中には, *you know* や *like* のように特に若者が多用するものが存在し, 古くは Lakoff (1973), そして, その後 Holmes(1995) の指摘にあるように, *sort[kind] of* のように女性が好むとされる談話標識も存在し, 年齢差や男女差も見いだせることがある。談話標識の新しい研究方向の一つとして, こうした社会言語学的な観点からの研究成果も期待される。<sup>10</sup>

以上, 様々な談話標識の特徴を見てきたが, 一つの談話標識がそのすべての特徴を備えているとは限らない。談話標識の全体的な特徴を一言で言うと, 「多種多様性」(diversity) を兼ね備えていると言える。こうした多様な談話標識を一つのカテゴリーとしてどのように捉えておけばよいのであろうか。

### 1.3 プロトタイプの文法カテゴリーとしての談話標識

一般に, 物事を一つのカテゴリーとして捉える場合に, そのカテゴリーに属するための特定の意味特性を定め, その意味特性を備えている場合にのみカテゴリーのメンバーとして認める考え方と, ある典型的なメンバー, すなわちプロトタイプ (proto type) を想定し, その典型的なメンバーに照らして, どの程度類似性を持っているかによってメンバーとして認める考え方がある。前者をカテゴリー化の「古典主義的な考え方」, 後者を「プロトタイプ論的な考え方」と呼んでおこう。(cf. 河上 (編) 『認知言語学の基礎』 pp.27-35) このプロトタイプ論的な考え方は, 元々, 語彙の意味カテゴリーを捉える考え方であったが [cf. Rosch (1978)], 特に認知文法 (cognitive grammar) の発展と共に広がりを見せ, 様々なレベルのカテゴリー化に援用できる考え方として定着している。

談話標識のカテゴリー化にあたって, このプロトタイプ論的な考え方が有効であると考えられる。(cf. Jucker & Ziv, 1998:1-5) すなわち, 談話標識にはある一定の共通した特徴は認められるにせよ, すべての特徴を各談話標識が共有するとは限らない。そして, ある

談話標識は極めて典型的な談話標識であるが、他のものはもっぱら文の構成要素の一部として働き、談話標識としては周辺的であると位置づけるのである。談話標識に段階性 (gradience) を認め、談話標識とそうでないもの境界は、曖昧なものである (fuzzy) とし、雑多な語句や表現を談話標識というカテゴリーに含め、まとめ上げることができる。

本稿では、談話標識は一つ文法的カテゴリーを形成しているものと考え、そのカテゴリーは、名詞、動詞、副詞、前置詞といったいわゆる品詞的なカテゴリーと並列的なものではなく、統語的なクラスとは独立したむしろ機能的なカテゴリーとして理解し、そのメンバーには種々の品詞、複数の構成要素を持つ言語表現を認めていく立場をとりたい。品詞的には、副詞、前置詞句、間投詞などが主なメンバーとなるが、最近注目を集めているレキシカル・フライズ (lexical phrase) と称される会話的定型表現も一部含め、談話標識として、その働きを考えていくことになる。<sup>11</sup>

ただし、プロトタイプ論的思考を採用するにあたって、談話標識のプロトタイプとはいったいどのようなものかという新たな問題も出てくる。ここで注意しておくべきことは、1.2で挙げた諸特徴をできるだけ多く持ったものが典型的な談話標識であるといったような考え方をすると、ある語彙の意味カテゴリーを規定する際に、その意味を特定化する意味素性 (semantic feature) をいくつ認めるのかという古典主義的な議論に戻ってしまうということである。また、名詞のように、談話標識のイメージ・スキーマといったものも想定しにくく、談話標識のプロトタイプ的な特徴としては、その名が示すように「『談話』レベルで機能し、話し手の何らかの発話意図を合図する『標識』である」ということにとどまるかもしれない。従って、各項目について、その使用される文脈をつぶさに吟味し、広くコミュニケーションにどのような貢献をしているのかをまとめ上げていく方が生産的である。いずれにしても、話し言葉においてはもちろんのこと、(くだけた) 書き言葉においても談話標識の頻度は高く、少し幅広く談話を眺めると、その談話の中で揺るぎない位置を占めていることにすぐ気づくことになろう。談話標識のイメージをもう少しはっきりさせるために、本稿の後半部分で、Fraser(1996, 1999, 2009) の枠組みと比較しながら、検討してみたい。

#### 1.4 談話標識的用法と他の用法との関係

上記の議論では、まず言語表現全体の中で談話標識をどう文法的に位置づけるかを考えたが、プロトタイプ論的な考え方は、ある一つの言語表現における様々な用法を理解する際にも応用できる。通例、談話標識として機能する語彙項目や言語表現は、ある特定の談話標識的な用法を認めるレキシカルフレイズを除いて、別途、文の命題内容を構成する要素としての機能を兼ね備えているものが多い。例えば、談話標識として幅広く用いられる *actually* についても、現実性あるいは真実性を強調する強意副詞として文要素として文に組み込まれて用いられ、「実際に、本当に」の意を表す。

(27) a. What did she *actually* say?—OALD<sup>7</sup>

- b. It's not *actually* raining now.—*ibid.*  
 c. That's the only reason I'm *actually* going.—*ibid.*

このように、一般に、ある言語表現は、複数の用法で使用されるが、談話標識的用法とその他の用法をどのように捉えておけばよいのであろうか。

一つの基本的な考え方として、談話標識的用法とそれらの本来的な品詞の用法と区別して、同音異義語的に捉えておくことができる。しかし、このような考え方では、それぞれの用法を列挙していくことになり、他の用法との関連もはっきりしない記述となる。また、談話標識の全体像もつかみにくい。

もう一つの考え方として、他の用法と連続性 (continuum) を持つものとして捉えていく考え方ができる。すなわち、ある言語表現は、一つの用法の発展的な用法として談話標識の機能を果たしていると捉え、また、ある言語表現は、典型的に談話標識として用いられるが、周辺的に副詞、前置詞句、間投詞として、本来の語彙の意味を反映した用法で用いられるというふうに理解するのである。そして、それらの用法は連続的につながっていると考えるのである。

こうした連続的な捉え方は、英語の歴史を踏まえた変遷にも裏づけられる。特に最近、文法化現象 (grammaticalization) といったことが注目され、長い時間の流れの中で、他の用法と連続的に談話標識的用法を捉えていく考え方が主流になってきている。<sup>12</sup>

### 1.5 談話標識にいくつの意味を認めるのか

では、次に、ある一つの談話標識の意味について考えていこう。その考え方としては、大きく、単一意味的アプローチと多義的アプローチがある。[cf. Schourup (1999, 2011)]<sup>13</sup>

単一意味的アプローチは、例えば、ある談話標識に三つの意味がある場合に、共通するコアの意味があると考え、その共通の意味から、その三つの意味を説明していくのである。それに対し、多義的アプローチでは、その三つの意味が順に発展していき、それぞれが別ものとして存在している、すなわち、多義であると考えるのである。一般的に、ある一つの言語表現についての意味発展を考えると、後者の考え方が自然であるが、談話標識の全体像を掴むためには、前者の考え方も重要である。

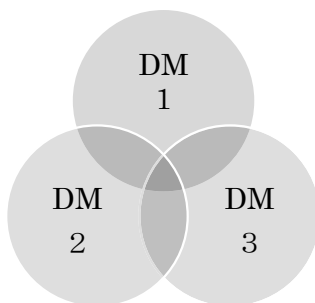


Figure 1: 単一意味的アプローチ

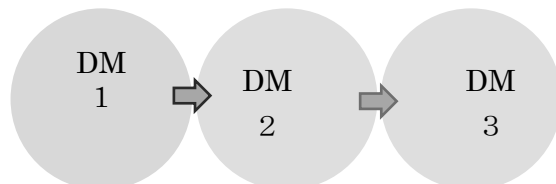


Figure 2: 多義的アプローチ

しかしながら、談話標識の意味を細分化し出すと、行き着く先は、文脈ごとに意味が違ふということになり、結局、捉えどころがなくなる。理想的には、様々な意味がある場合には、まずいくつかの主だった意味用法にグループ化し、その共通の意味をつきとめていくと、その全体像をつかみやすい。そのようなグループ化をしていく上で、談話標識の機能的特徴を考えていく必要がある。以下、談話標識の機能という観点から少し考え直したい。

## 1.6 談話標識が機能する領域

談話標識が機能するいくつかの領域 (domain) について、Jucker & Ziv (1998) が以下のよう

The different studies of discourse markers distinguish several domains where they may be functional, in which are included *textual*, *attitudinal*, *cognitive* and *interactive* parameters. (Jucker & Ziv, 1998:4) [斜体は筆者による。]

様々な談話標識の研究によって機能的にいくつかの領域が区別されており、その領域には、テクスト的、態度的、認知的、相互作用的なパラメーターが含まれることが指摘されている。さらに、談話標識の難しさは、もっぱら一つの機能面で働く談話標識と、ある一つの談話標識が、複数の機能面で作用したり、すべての機能を包括するような談話標識が存在していることである。こうした談話機能の多機能性を理解するために、本稿では、「談話的志向性」(discourse orientation) という概念を導入し、談話標識の機能の理解を深めておきたい。<sup>14</sup> ここで言う談話的志向性とは、ある言語表現がある特定の文脈で用いられる場合に、どのような機能側面に焦点が当てられるのかを方向付ける特性のことを言っている。

談話標識の多機能性は、その多機能のうち、具体的な文脈の中では、談話的志向性によって、特定の機能が発揮されていくと考えるのである。それぞれの談話標識は具体的に何に向けられるのか、すなわちどのような志向性 (orientation) を持っているのかという点から眺めることによって、具体的な談話機能が明らかとなる。そして、同時に複数の機能を果たす場合には、その主たる機能と付随的な機能を区別していくことになる。そして、この談話的志向性は、談話標識の使い分けにも有効である。類似した意味を持つ談話標識の中から、実際の発話状況ではある特定の談話標識が選択されることになるが、それぞれの談話標識は、談話的志向性を内在しており、その文脈的志向性によって、最もふさわしい談話標識が選択されるというふうと考えていくのである。

この談話的志向性を加味して談話標識の多機能を少し具体的に述べると、第一に、「話者態度 (speaker's attitude) への志向性」を担う談話標識があり、これから述べようとする (あるいは現在述べている) 内容に対して話し手の態度が表される。そして、談話標識によって命題内容自体の談話的特徴付けが行われ、さらに、発話全体として遂行される発話行為と関連を持つことがあり、それぞれの発話条件との絡みで談話標識が機能することになる。

また、特に先行文脈や状況とのかかわりで、驚き、怒り、悲しみ、歓喜等、様々な感情が、談話標識によって表されることもある。第二に、「情報価値 (informational value) に対する志向性」がある。<sup>15</sup> ある種の情報 (新情報/旧情報) を受容し、それに対する反応を表し、そのような情報を提示し、後続内容に対する話し手の肯定的あるいは否定的判断が談話標識によって合図される。第三の志向性としては、談話標識は、先行文との関係ばかりでなく、幅広く談話構造と関わり、「談話構造 (discourse structure) への志向性」が見いだせる。談話全体の切り出しから締めくくりに至るまでの各段階で、その談話構成と関わって談話標識が重要な機能を発揮する。まず、発話の生産と関わって、「切り出し」、「途中の言いよどみ」、「修正」、「進展」、「締めくくり」の各段階で談話標識現が機能する。特に、「順番交代 (turn-taking)」との関わりで果たす機能も大きく、その他、「話題セクション (topic section)」と関わって、「話題の開始」、「話題の継続」、「話題の変更」、「話題の終了」を合図する。さらに談話構成の下位区分との関わりで、“pre-sequence”や“side-sequence”と呼ばれる談話構成の単位とも関係し、談話の途中で様々な調整が行われていく。

最後に、談話標識の重要な働きとして、相手との対人関係の調整に関わる機能がある。この志向性は、他の三つの志向性と並行的に生じる志向性で、特に第二の「話者態度への志向性」との関わりが深い。この意味において、「対人関係 (interpersonal relation) への志向性」は、他の志向性のとは異なるレベルの上位概念として規定しておくべきであると考えられる。その志向性を担った談話標識は、聞き手の面子 (face) と関わり、話し手の控えめな言動や相手に対する丁寧さを表し、話し手の面子 (face) と関わる場合には、その裏腹にある自己防衛的な姿勢が打ち出されるのである。(cf. Brown & Levinson (1987))

以上、簡潔に、本稿において想定する談話標識の機能について述べたが、注意しておくべきことの一つとして、ある談話標識がその現れた文脈の中で同時に複数の機能を果たすことがあり、このような場合に志向性そのものも明確に区分できない場合があるということである。談話標識の機能や志向性の境界についても曖昧な (fuzzy) なものとして捉えておきたい。<sup>16</sup>

本節では、談話標識に関して、若干の具体例を挙げながら、全体的な特徴や、意味や機能についての基本的な考え方を整理した。以下、少し具体的に話を進め、Fraser(1996, 1999, 2009) の枠組みを吟味しながら、どのような言語表現を談話標識として分析すべきかを考えていきたい。

## 2. どのようなものが談話標識でないのか？—研究対象となる談話標識

Fraser(1996, 1999, 2009) は、これまでの談話標識研究アプローチで、最も網羅的に談話標識を捉えているものであると言える。Fraser の枠組みを検討することによって、談話標識にどのようなものが含まれるのかを検討したい。その方法論として、逆説的に、Fraser の枠組みを吟味しながら、どのようなものが談話標識に含まれるのかという側面と、どのようなものが談話標識から除かれるのかという観点から議論していきたい。というのも、

Fraser の枠組みでは、語用論標識の下位区分として談話標識を認めているが、厳密にその具体的な項目を見てみると、語用論的標識の他の区分の中に入れ、談話標識には含めていないものも、筆者の立場としては談話標識として認めたいものもあるし、逆に、Fraser の枠組みでは、談話標識として挙げている項目の中にも、その分析対象からは除いておくべきものが含まれるからである。

## 2.1 Fraser の枠組み

Fraser の枠組みでは、まず、「すべての文には直接メッセージを伝達する力 (direct message potential) がある」と仮定している。この力は、文の意味から派生し、発話から潜在的に伝達されうる様々なメッセージの一つとして具現化される。そして、文の意味は、命題内容的な意味 (the propositional content meaning) と非命題内容的な意味 (the non-propositional content meaning) から構成され、後者の意味は、異なるタイプの合図 (signal)、すなわち、語用論的標識 (pragmatic markers) によって表されると考えている。この語用論的標識は、以下のような定義が与えられている：

These pragmatic markers, taken to be separate and distinct from the proposition content of the sentence, are the linguistically encoded clues which signal the speaker's potential communicative intentions. (Fraser, 1996:168)

Fraser(1996) では、この語用論的標識の下位区分として、基本的標識 (basic markers)、評言的標識 (commentary markers)、並列的標識 (parallel markers)、談話標識 (discourse markers) を設けている。そして、Fraser(2009) では、並列的標識を評言的標識に吸収し、従来の談話標識をさらに分割し、新たに談話管理標識 (discourse management markers) を第四の下位区分を設けている。以下、それぞれの下位区分について、詳しく吟味し、本稿における談話標識の扱いと比較しておきたい。

### 2.1.2 基本的標識 (basic markers) について

基本的標識は、概念的な意味を持ち、それぞれの文の発話の力を合図する標識のことを言っている。基本的標識については、さらに以下の下位区分がされている。

- A. 構造基本的標識 (structural basic markers)
- B. 語彙基本的標識 (lexical basic markers)
  - 遂行的表現 (performative expressions)
  - 語用論的イディオム (pragmatic idioms)
- C. 混成型基本的標識 (hybrid basic markers)
  - 平叙文混成型表現 (declarative-based hybrids)
  - 疑問文混成型表現 (interrogative-based hybrids)

### 命令文混成型表現 (imperative-based hybrids)

まず、A の構造基本的標識 (structural basic markers) とは、それぞれの文の法性 (mood) を指しており、平叙文、命令文、疑問文の構造自体が様々な発話の力を合図すると考えている。B の語彙的基本標識 (lexical basic markers) は、発話の力が各語彙項目によって明示されるものを持っており、具体的には、いわゆる遂行動詞 (performative verbs) を含む表現や、文副詞や名詞句で発話の力が明示されるものを持っている。

- (28) a. I (*hereby*) *apologize* for running over your cat.  
b. I *must ask* you to lave now.  
c. *Admittedly*, we were expecting a much younger person.  
d. *My request is that* you go at once.

筆者の立場としては、命題内容に組み込まれている文要素は談話標識としては認めないが、命題そのものとは分離された形となる、一般に言う文副詞は談話標識として認めたい。したがって、(28c) の *admittedly* は、談話標識に含め、「承認」や「認可」といった発話の力を明示する働きと共に、(29) のように、しばしば後続する *but* と呼応し、話し手の本音を主張する際の前言の一部として用いられる機能を重視したい。

- (29) *Admittedly*, it is rather expensive *but* you don't need to use much.—OALD<sup>7</sup>

また、語用論的イディオム (pragmatic idioms) の例として、*please(kindly)* や *perhaps* を挙げているが、これらについても、談話の中では、様々な機能を持つことがあり、談話標識に含めるべきである。ただし、以下のように、文の構成要素として組み入れられているものについては、Fraser と同様に、談話標識としては扱わない。

- (30) a. *How about* going?  
b. *What do you say (that)* we leave?  
c. *Let's* try it again.  
d. *You'd better* sit down.

その他、様々な発話行為を合図する成句が例として挙げられているが、現在では、やや古風な響きを伴うが、(31) のような文字通りの意味が薄れたレキシカルフレーズは、談話標識として含めたいが、(32) のように文字通りの意味解釈がされる表現については、談話標識という呼称になじまない。<sup>17</sup>

- (31) *Mark my words*, he will never finish on time.



(32) *If I may say so myself*, no one else can do it so well.

さらに、以下のように文レベルで様々な語用論的意味を表すものは、非常に興味深いが、談話標識とは呼び難い。

(33) Get a horse. [Directive to hurry up]

(34) Where's the fire? [Challenge for necessity of speed]

(35) I smell a rat. [Claim that all is not well]

Fraser では、いわゆる間投詞はすべて、語用論的イディオム (pragmatic idioms) の下位区分の一つとして、メッセージイディオム (message idioms) として扱っている。ただし、他の多くの研究者が談話標識として扱う *Oh* や *OK* については、別途、コメントを付して、談話標識の用法があることを認めている。常にある特定の感情表出として用いられる間投詞については、その意味記述をすることで十分であるが、間投詞自体を 1.2 のようなプロトタイプ論的なカテゴリとして捉え、様々な用法を認め、その機能を記述していくといったアプローチを取る方が、他の言語表現との関係からも生産的である。

最後に、混成型基本的標識では、付加疑問文や法助動詞を用いた疑問文、*why* 疑問文、命令文 + *and[or]...* などが取り上げられ、それぞれが発話行為と関わることが示されている。

(36) a. John saw Mary, *didn't he*?

b. John didn't see Mary, *did she*?

c. John dated Mary, *did he*?

(37) a. *Can [Could/Can't/Couldn't]* you do that?

b. *Will [Would/Won't/Wouldn't]* you do that?

(38) a. *Why* take an aspirin now?

b. *Why not* take an aspirin now?

(39) a. *Take, or* I'll shoot you. [If you don't take, I will shoot you.]

b. *Wash, and* I'll dry. [If you wash, I will dry.]

以上、基本的標識 (basic markers) を見てきたが、Fraser の立場と筆者の立場を比較すると以下のようにまとめることができる。

- ①基本的標識は、Fraser の立場と同様に、原則としては、談話標識のカテゴリに含めない。
- ②但し、語用論的イディオムとしているものの中で、文副詞的な振る舞いをする *please* や *perhaps*、さらに一部のレキシカルフレイズは、談話標識として認める。また、間投詞的表現については、特定の感情表出のみの機能にとどまるものについては、分析対象としないが、*oh* や *well* のように、多機能を持つものについては、談話標識として認める。

### 2.1.3 評言的標識 (commentary markers)

Fraser では、評言的標識 (commentary markers) として、以下の七つの種類に分けて例示している。

- ① 評価標識 (assessment markers): *Amazingly*, Derick passed the exam.
- ② 様式標識 (manner-of-speaking markers): *Frankly*, you need to stop now.
- ③ 証拠明示標識 (evidential markers): *Certainly*, He will go.
- ④ 結果・効果標識 (consequent-effect markers): *By way of explanation*, Peter is finally divorced.
- ⑤ 伝聞標識 (hearsay markers): *Reportedly*, the game was postponed because of rain.
- ⑥ 緩衝標識 (mitigation markers): *If you don't mind*, bring it to me about 7 this morning.
- ⑦ 強調標識 (emphasis markers): *Do* stop.

上記のように、評言的標識 (commentary markers) には、文副詞がほとんどすべて含まれることになるが、文副詞については、それぞれ固有の語彙的意味をとどめているが、談話において、特に話し手の態度表明と関わって重要な役割を果たし、談話標識として扱っておきたい。[cf. Ifantidou-Trouki (1992), Sperber & Wilson(1993), Blakemore(2002)]. しかしながら、評言的標識全体では、Fraser の立場と筆者の立場は、以下の点で異なる。

- ① 評価標識について、文副詞は、談話標識として扱うが、その異形として挙げている *It is*[was] + 形容詞, *What is more* + 形容詞 *is* [was] *that...* 等の構文形式は、談話標識として扱わない。
- ② 様式標識については、*~ly speaking, to speak ~ly* などは、談話標識として認める。また、*y'know* をここに含めているが、*y'know* は、典型的な談話標識の一つである。
- ③ 伝聞標識の中で、*It is claimed...* 等、*that* 節が後続する表現は、談話標識として扱わない。
- ④ 緩衝標識について、*if you don't mind* などのレキシカルフレーズは、談話標識として扱うが、その他の文形式の表現は含めない。
- ⑤ 強調標識については、*really* のように文副詞的にも機能する表現は、談話標識として認めるが、その他の強調を表す文法要素は談話標識としては認めない。

### 2.1.4 並列的標識 (parallel markers)

並列的標識 (parallel markers) とは、基本メッセージと共に、並列的に添えられる標識を言い、以下の三つの下位区分を設けている。

- ① 呼びかけ標識 (vocative markers): *Mr. President*, what position are you taking today?
- ② 話者不快標識 (speaker displeasure markers): Get you *damned* shoes off of the table.
- ③ 連帯感標識 (solidarity markers): *My friend*, we simply have to get our act together and face this problem.

並列的標識 (parallel markers) については, Fraser の立場と同様に, 談話標識としては扱わない。

### 2.1.5 談話標識 (discourse markers)

Fraser は, 当初, 語用論標識と並行的に, 談話標識 (discourse markers) を1つの区分として設け, 以下のように定義している。

Discourse markers signal the relationship of the basic message to the foregoing discourse. In contrast to the other pragmatic markers, discourse markers do not contribute to the representative sentence meaning, but only to the procedural meaning. They provide instructions to the addressee on how the utterance to which the discourse marker is attached to be interpreted. (Fraser 1996: 169)

さらに, 談話標識は以下の4つに下位区分されている (Fraser 1996: 187-88).

- ① 話題転換標識 (topic change markers) : 話し手の考えでは, 後続の発話は現在話している話題とは異なる。
  - a) I don't think we can go tomorrow. It's David's birthday.  
*Incidentally*, when is your birthday?
  - b) *Speaking of* Martha, where is she these days?
- ② 対比標識 (contrastive markers) : 後続の発話は, 先行の発話に関連する命題を否定するか対照的なものである。
  - a) A: We can go now, children.  
B: *But* we haven't finished our game yet.
  - b) John won't go to Poughkeepsie. *Instead*, he will stay in New York.
  - c) Jane is here. *However*, she isn't going to stay.
- ③ 詳細表示標識 (elaborative markers) : 後続の発話は, 先行の発話の内容を詳述する。
  - a) Take your raincoat with you. *But above all*, take gloves.
  - b) I think you should cool off a little. *In other words*, sit down and wait a little bit.
  - c) He did it. *What is more*, he enjoyed doing it.
- ④ 推論標識 (inferential markers) : 先行の発話から導き出せる結論を示す。
  - a) Mary went home. *After all*, she was sick.
  - b) A: Marsha is away for the weekend.  
B: *So*, she won't be available Saturday.

Fraser(2009) においては, それまでの分類が改編され, 大きな枠組みとしては全てを語用論的標識 (pragmatic markers) として統括している。並列的標識は評言的標識に吸収し,

従来の基本的標識，評言的標識，談話標識の3区分と共に，新たに談話の構造に関するメタコメントを示す談話管理標識 (discourse management makers) を設定し，以下のように下位区分される。(Fraser, 2009: 893).

談話管理標識 (discourse management markers)

- ① 談話構造標識 (discourse structure markers) : 後続の部分が談話の全体構造の中でどのような位置を占めているかを示す。(first, second, finally, then, in summary, etc.)
- ② 話題方向付け標識 (Topic Orientation Markers) : 後続の談話の話題に関する話し手の意図を示す。(anyway, back to my original point, before I forget, etc.)
- ③ 注意喚起標識 (Attention Markers) : 話題の転換が起こっていることを示す。しばしば話題方向付け標識と共に起すが，どのような転換が起こるかは示さない。(ah, alright, anyway, anyhow, hey, in any case, in any event, etc.)

Fraser の談話標識に含まれる言語表現については，基本的に談話標識として認めてよいが，一部，文字通りの意味解釈で機能する言語表現については，分析対象から外しておきたい。例えば，推論標識として採録している “it can be concluded that...” や “it stands to reason that...” , “on this/that condition” などは，確かに推論の結果を合わす表現として機能するが，談話標識の分析対象とはしない。

現時点での Fraser の分類は，以下のように整理し直すことができる。

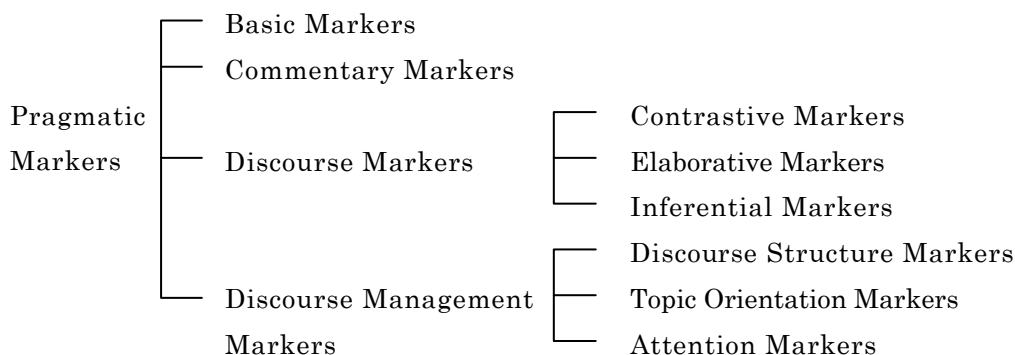


Figure 3: 語用論的標識 (pragmatic markers) の分類

以上，Fraser の枠組みを吟味しながら，逆説的に，談話標識に含まれないものを特定化することによって，取り扱うべき談話標識の射程を定めようと議論を進めてきた。ここで改めて，談話標識の持つ諸特徴のうち，筆者の重視する三つの談話標識の特徴を改めてまとめておきたい。

- ① 広く副詞的に機能し，文全体にその意味機能が及ぶもの，そして，さらに，文を越えて

幅広い談話構造と関連して機能する要素を扱う。

- ②多機能を備え、談話の流れと共に、話し手や聞き手に作用して、様々な機能を果たす要素を扱う。
- ③統語的には周延的な要素として位置づけられ、事実記述として命題内容に組み込まれていない要素を扱う。

### 3. まとめ—再び原点に戻って

談話標識が捉えにくいのは、やはりその名称そのものに原因があるように思われる。単純に考えれば、「談話標識」(discourse markers)というのは、「談話」(discourse) + 「標識」(markers)ということである。ここで問題となるのは、「談話」というのをどう解釈するかということである。言語の構成単位の一つとして、語<句<節<文<談話の流れの中で捉えると、Swan(2005:135)の言うように、「文を越える言語的単位」ということになり、複数の文から構成されるテキスト(text)だけに言及した用語となるが、これを広義に解釈し、文を越える様々な要素を考慮するというのであれば、事情が異なってくる。後者の場合、その言語化された文脈のみならず、その生産に関わる話し手、それを解釈する聞き手、さらにそれが発話される状況をすべて含み、それに関わるのが談話標識であるとする、その意味が大きく変わってくる。広義の解釈をすると、談話標識は語用論的諸要素を含む用語となる。談話標識は様々なアプローチから研究され、その分析対象となった言語表現の範囲も広がっていき、その研究が進むにつれて、ますます一般化することが難しくなっていくのである。<sup>18</sup>

次に、「標識」(marker)の意味を考えてみよう。OALD<sup>7</sup>では、“marker”以下のような定義を与えている。

marker: a sign that *sth* exists or shows what it is like

「あるものが存在している、あるいは、それがどのようなものであるかを示すサイン」とある。しかしながら、「談話標識」は「談話を表す標識」ではない。「談話的特徴を示す標識」である。従って、具体的に“a marker of [for] what?”を問うことになる。そして、この*what*の内容として、様々な観点からの談話標識の機能が考えられるのである。言い換えると、この*what*の解釈によって談話標識の定義が変わってくると思われる。談話標識として扱われる言語表現は、何かを合図している、あるいは示しており、命題の一部として何かを記述しているものではない。

Fraserでは、談話標識を説明する際に、いわゆる首尾一貫性基盤(coherence-based)の考え方がまずあり、意味機能の記述では、認知基盤(cognition-based)の立場をとっている。従って、Fraser流の談話標識は、「どのような言語単位であろうと、二文に渡る二つの言語要素を関係づけるものであり、その意味は、概念的なものではなく、手順的なものである」といった説明になる。一方、Blakemoreを中心とした関連性理論では、談話標識は、

他の言語表現と共通して、「最適関連性 (optimal relevance) を保証する」言語表現であり、談話標識の言語学的意味 (linguistic meaning) としては、もっぱら手順的な意味 (procedural meaning) を表し、その手順的な意味に多様性があるということになる。筆者としては、特に、ある特定の言語理論に立脚する立場を取らないが、談話標識の考え方として、Fraser や Blakemore の一連の研究も踏まえ、コミュニケーションの観点から、以下のように集約しておきたい。

「談話標識」(discourse markers) とは、言語コミュニケーションに従事する話し手のコミュニケーション活動への貢献の一部として、伝達する発話メッセージ [命題内容] の周辺に位置し、聞き手がその発話メッセージを正しく理解するように、(意識的、あるいは無意識的に) その意味解釈の仕方を合図するものである。そして、その意味解釈の仕方を合図するにあたり、談話的志向性 (discourse orientation) を兼ね備えており、文脈に応じ、話し手の態度表明・感情表出、情報価値、談話構造、対人関係等に意識を向けさせる言語表現を言う。

英語学習者にとっては、個々の談話標識について、その用いられる文脈をつぶさに吟味し、どのような談話的志向性を発揮しているかを記述していくことが重要であるように思われる。談話標識研究が本格的になってから四半世紀たった今、筆者としても、もう一度原点に立ち戻り、次稿で、最も捉えにくい (elusive) 談話標識とされる *well* の分析に挑みたい。

なお、本稿の Appendix として、筆者の立場から、研究対象とすべき談話標識及び関連表現を機能的に分類し、それぞれの項目で主だったものを列挙した。談話標識を全体的に眺め、今後の談話標識研究の一助になれば、幸いである。

## 注

- 1 *kind [sort] of* は、もちろん、原義的には名詞 + 前置詞から生じた表現であるが、「ちょっと、少し」(slightly) の意の程度副詞で機能するので、副詞として分類している。
- 2 命題内容の一部となる「結局、やはり」の意では、通例、文尾にくることに注意：So you made it *after all!*—OALD<sup>7</sup> /She didn't get the job *after all.*—EED
- 3 次例のように命令文の文頭にくることは可能 (Kay, 1997:147): *Kinda* twist it over the flange and under the casting. また、主語が省略されて文頭に現れることがある：“Did she really do it?” Columbo lifted his eyebrows high and turned down the corners of his mouth. “*Kinda* looks like she did. It'll be for a court to decide.”—Harrington, *Killer* / Oliie looked: DEAD GOD, PLEASE FORGIVE ME. FOR WHAT I DID TO CMICHEL. “Don't mean a shit.” “*Sort of* lets Milton off the hook, though, don't you think?”—Ed McBain, *Romance*
- 4 Greenbaum & Quirk(1990:235) では、以下のように述べている：The tag typically a rising tone, and the statement is characteristically preceded by oh and so, indicating the speaker's

arrival at a conclusion by inference, or by recalling what has already been said. The tone may be one of sarcastic suspicion. また, Thomson & Martinet(1980:97) では, 事実の確認を示すとして, 「肯定+肯定」の付加疑問文を以下のようにパラフレイズしている: You've found a job, have you? = *Oh, so you've found a job.*

- 5 同じ結論を導く *therefore* は, こうした用法では不自然となる。一般に *therefore* は堅苦しい言い方となり, スタイル上, 話し言葉に特徴的な単独用法はなじまないと考えられる: A: Your clothes smell of perfume. B: ?*Therefore (what)?* (Blakemore, 1992:)
- 6 こうした用法は広がっており, 文脈により, 他の接続詞の例も見受けられる: “She’ll come back.” “*Or?*” “No *or*. She’ll come back.” —R. Parker, *Chance*/ “I should’ve gone back and bombed the whole fucking building. Maybe I would’ve.” “*If?*” “If I wasn’t here.” —J. Kellerman, *The Clinic* / “Does that mean you trust me?” “Yes.” “*Even though...?*” “Even though,” Jesse said.—R. Parker, *Night Passages*
- 7 さらにくだけたぞんざいな言い方では, *what* の使用も多い: “When did you learn he was missing?” “*What?*” —E. McBain, *Mischief* / “Well, I’m not a mare’s nest. I know what I want and what I don’t want.” “Yeah? *What?*” “What do you mean what?” “I mean what do you want and what you don’t want.” —R. Parker, *Promised Land* その他, 関係代名詞の *which* を伴う以下のようなバリエーションも多く見受けられる: “I’m a problem. I’m not doing what I want to be doing.” “*Which is?* Making money?” “Sure,” she says, challenging him. “That’s what it’s all about, isn’t it?” —L. Sanders, *Timothy’s Game* / “But she was not interested in the truth.” “*Which was?*” —W. Harrington, *Columbo: The Hoover Files* / “Then what happens afterward?” “I stop and socialize.” “Aha. *Which means...?*” —E. Segal, *Oliver’s Story* / “In 1982 after United States recognition, the People’s Republic of China was granted an immigration in line with the Immigration Act of 1965.” “*Which meant?*” —R. Parker, *Walking Shadow* / “And Marty Anaheim sends some people to follow you to find Anthony.” “*Which means what?*” “*Which means* Mr. Fish either knows he’s been robbed, or is suspicious.” —R. Parker, *Chance* さらに, 次のような *meaning* も談話標識化していると考えられる: “Word is, it’s the company he keeps,” says Leo. “*Meaning?*” —S. Martini, *The Judge* / Kaplan hesitated. “Meredith is suitable.” “*Meaning what?*” —M. Crichton, *Disclosure* 詳しくは, 廣瀬 (2000, 2001) を参照。
- 8 Schourup (2001:1033-1034) では, *Well?* と他の表現を比較し, *Well?* の方が *Yes?* や *Huh?* よりも相手に強く発話を促すとしている。また, *And?* についても, *Well?* ほど押しつけがましくないとしている。さらに, *So?* と *Well?* と比較し, 以下の興味深い例を示している: A: I leaned three new words today.[pause] B: *So?/ Well?* 前者では, その結果を尋ねることになるが, 後者では, その学んだ3語を求めていることを示唆すると述べている。
- 9 アメリカ英語では, *eh* の代わりに *huh* が用いられることが多い。[OALD<sup>7</sup>] カナダ英語の特徴については, Bailey(1983) を参照されたい。また, ニュージーランド英語における *eh* の用法については, Stubble & Holmes(1995) 等の研究成果がある。なお, *eh* は, しばしば単独で用いられる: “Janet is leaving her husband.” “*Eh?*” —*CIDE*

- 10 K. Aijimer を中心に、社会言語学的な観点を加味し談話標識を研究する言語変異的語用論 (variational pragmatics) という新しい研究分野も確立しつつある。(cf. Aijimer(2013))
- 11 レキシカルフレイズ自体がまた様々なものを含むので、品詞的に談話標識をまとめ上げることは難しい。
- 12 Jucker(1995)によって、歴史的語用論 (historical pragmatics) という用語も定着してきた。従来の用法から射程 (scope) の発展として談話標識を捉えた Tabor & Traugott(1998) なども参照。
- 13 ここで、談話標識の意味をそれぞれ同音異義語的に捉えていくのは生産的ではない。Jucker (1993:437)においても、こうしたアプローチはまったく解決方法にならず、何ら一般化は得られないもので、敗北宣言に等しいと指摘している。
- 14 廣瀬 (1999) では、メタ言語的活動の志向性を論じたが、談話標識も広くはメタ言語的活動の一環としても捉えられ、共通する概念で説明できる。
- 15 本稿では、関連性理論や認知文法における「認知」の使い方と混乱が生じることをさけ、この志向性を「認知的な志向性」(cognitive orientation) とは呼ばない。
- 16 本稿では、志向性 (orientation) という概念で、談話標識の多機能を捉えたが、それぞれが機能する領域 (domain, sphere), それぞれが機能する層 (layer), それぞれの構造 (structure), 枠組 (framework), 状態 (state) 等、様々な概念で捉えることもできる。[cf. Schiffrin(1987), Redekker(1999)]
- 17 本稿の Appendix では、筆者の立場から研究対象としたい談話標識を機能的に分類しているが、(関連表現) では、幅広くレキシカルフレイズを取り上げている。
- 18 一例を挙げると、談話標識は先行文脈がなくとも使用することができるものがあり、談話を狭義のテキストレベルのみで捉え、それと関係する要素として捉える考え方では、次のような対比を表す *but*, *however*, *nevertheless* の違いを捉えることは難しい : (Blakemore, 2002:116) (i) a. I am sure she is honest. *Nevertheless*, the paper are missing. b. I am sure she is honest. *But* the paper are missing. c. I am sure she is honest. *However* the paper are missing. (ii) [in response to: Have you got my paper?] a. Yes, *but* the last page is missing. b. Yes. *However*, the last page is missing c. Yes. ?*Nevertheless*, the last page is missing. (iii) [speaker, who is in shock, has been given a whisky] a. *But* I don't drink. b. ?*However*, I don't drink. c. \**Nevertheless*, I don't drink.
- 先行文脈なしで用いることができる談話標識は、*but* のみではない。*and* や *so* も談話の切り出しで用いることができる (Blakemore, 2002 :118) : [the speaker( a young child) triumphantly presents her mother with flowers] *And* I've got you a present. / [speaker finds bunch of flowers and birthday card on doorstep] *And* I thought she'd forgotten. / [driver takes a right turn at an intersection] PASSENGER: *So* we're not going past the post office. cf. PASSENGER: ?*Therefore* we're not going past the post office.



## 参考文献

- Bailey, R.W. 1983. "The English language in Canada." In Bailey, R. and M. Gollach (eds.), *English as a World Language*. Ann, Arbor: University of Michigan Press.
- Ball, W.J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. New York: Macmillan.
- Bell, D.M. 2009. "Mind you." *Journal of Pragmatics* 41, 915-920.
- Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- . 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell.
- . 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2009. "Topic Orientation Markers." *Journal of Pragmatics* 41, 892-98.
- Briton, L.J. 1996. *Pragmatic markers in English Grammaticalization and discourse functions*. Berlin: Mouton de Gruiter.
- Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Universals in language usage: politeness phenomena*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fraser, B. 1990. "An approach to discourse markers." *Journal of Pragmatics* 14, 383-395.
- . 1996. "Pragmatic markers." *Pragmatics* 6(2), 167-190.
- . 1999. "What are discourse markers?" *Journal of Pragmatics* 31, 931-952.
- . 2009. "Topic Orientation Markers." *Journal of Pragmatics* 41, 892-98.
- Greenbaum, S. and R. Quirk. 1995. *A Student's Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 廣瀬浩三. 1988. 「英語の談話修正表現について」六甲英語学会（編）『現代の言語研究』263-74. 東京：金星堂.
- . 1989a. 「談話辞 anyway の分析」『語法研究と英語教育』11, 29-38. 東京：山口書店.
- . 1989b. "A Discourse Grammar of *anyway*." 『島根大学法文学部紀要文学科編』11(2), 1-20.
- . 1997. 「Love means never having to say "What do you mean?"—メタ言語活動の諸相(1)」『島大言語文化』4, 14-61.
- . 1998. 「メタ言語的観点から見た英語表現について」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会（編）『現代英語の語法と文法』東京：大修館書店. 287-95.
- . 1999. 「Love means never having to say "What do you mean?"—英語におけるメタ言語的活動の諸相(2)」『島大言語文化』7, 1-51.
- . 2000. 「語法研究の立場から見た談話標識」『英語語法文法研究』7, 35-50.
- . 2001. 「談話の展開を促す談話標識」『英語青年』Vol. CXLVII, No.7, 446-47. 東京：研究社.
- . 2003. 「関連性理論から見た談話標識」『島大言語文化』14, 21-41.
- . 2012 「談話標識を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第7号, 1-37.
- Holmes, J. 1995. *Women, men and Politeness*. London: Longman.
- Ifantidou-Trouki, E. 1992. "Sentential adverbs and relevance." *Lingua* 90, 69-90.

- Jucker, A. 1993. "The discourse marker *well*: A relevance-theoretical account." *Journal of Pragmatics* 19, 435-452.
- . (ed.). 1995. *Historical Pragmatics, Pragmatic Developments in the History of English*. P&B ns. 35. Amsterdam: John Benjamins.
- Jucker, A.H. and S.W. Smith. 1998. "And people just you know like 'wow'; discourse markers as negotiating strategies." In A. Jucker & Y. Ziv (eds.), *Discourse Markers: Description and Theory*. P & B.ns.57. Amsterdam: John Benjamins. 171-222.
- Jucker, A. and Y. Ziv (eds.). 1998. *Discourse Markers: Description and Theory*. P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins.
- 河上誓作 (編) 1996. 『認知言語学の基礎』 東京 : 研究社.
- Lakoff, R. 1973. *Language and Women's Place*. Lang. Soc. 2, 45-80.
- Langacker, R.W. 1986. *Foundations of Cognitive Grammar Vol.I. Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- . 1992. *Foundations of Cognitive Grammar Vol.II. Descriptive Applications*. Stanford: Stanford University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Redeker, G. "Review of Schiffrin, 1987." *Linguistics* 29, 1139-1172.
- Rosch, E. 1973. "Principles in Categorization." In N. Warren (ed.) *Studies in Cross-Cultural Psychology*, Vol. 1, 1-49. London: Academic Press.
- Schiffrin, D. 1985. "Conversational coherence: the role of 'well.'" *Language* 61, 640-667.
- . 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D., D. Tannen and H.E. Hamilton (eds.). 2001/2004. *The Handbook of Discourse Analysis*. Oxford: Blackwell.
- Schourup, L.C. 1985. *Common Discourse Particles in English Conversation*. New York & London: Garland.
- . 1999b. "Discourse markers." *Lingua* 107, 227-265.
- . 2000. "Homing in on Discourse Marker Meaning." 『英語語法文法研究』 7, 5-17.
- . 2001. 'Rethinking *well*.' *Journal of Pragmatics* 33, 1025-1060.
- Schourup, L.C. and T. Waida. 1988. *English connectives*. 東京 : くろしお出版.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995<sup>2</sup>. *Relevance: communication and recognition*. Oxford: Blackwell.
- Stubble, M. and J. Holmes. 1995. *Language and Communication Vol. 15*, 630-88.
- Swan, M. 2005<sup>3</sup>. *Practical English Usage*. London: Oxford University Press.
- Tabor, W. and E.C. Traugott. 1998. 'Structural scope expansion and grammaticalization.' In Ramat, A.G. and P.J. Hopper (eds.), *The Limits of Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins. 229-72.

Thomson, A.J. and A.V. Martinet. 1980. *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Traugott, E.C. 1995. "The role of development of discourse markers in a theory of grammaticalization." Paper given at the International Conference on Historical Linguistics 12, Manchester.

Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic form and relevance." *Lingua* 90, 1-25.

<辞書>

*Chambers Essential English Dictionary*. 1995. [EED]

*Longman Dictionary of English Language and Culture*. 1998. Second Edition. [LDEL<sup>C2</sup>]

*Longman Advanced American Dictionary*. 2000. [LAAD]

*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 7<sup>th</sup> Edition. 2005. [OALD<sup>7</sup>]

*Random House Webster's Dictionary of American English*. 1997. [RHWD<sup>AE</sup>]

### Appendix: 談話標識及びその関連表現の機能的分類

以下、必ずしも網羅的ではないが、本稿の立場から分析されるべき主だった談話標識を機能別にまとめておきたい。(関連表現)は、周辺的な談話標識、あるいは、談話標識として分類されないが、機能上、類似の働きをし、談話標識と比較すべきものを列挙している。

#### I. 談話構成機能

談話標識は、話し手が談話をどのように組み立てて述べていくのかを合図する。直前の文との関係を表すことが多いが、より幅広い談話の構成、あるいは一連の談話全体と関わって、談話の終結等を合図する機能を持つ。

#### I-1. 先行文脈あるいは後続する陳述と関わって、談話構成を合図する機能

① 【付加的機能】 前言に付け加えを行うことを合図する。

\**also; and; besides; further; furthermore* (formal); *in addition; moreover* (very formal); *plus* (informal); *too* (informal); *what is more*

(関連表現)

\**as well as that; on top of it all* (off); *on top of that* (informal); *another thing is; to cap it all* (off),

【同格的機能】

② -1 [言い換え機能] 別の言い方で言い換えることを合図する。

\* *in other words; I mean (to say); namely; that is (to say)*

(関連表現)

*\*(to) put it another way*

② -2 [例示機能] 具体的な例を挙げることを合図する。

*\*e.g.; for instance; for example; thus; in particular*

(関連表現)

*\*to illustrate*

② -3 [比喩機能] 比喩的な具体例を述べることを合図する。

*\*as it were; like; more or less; kind [sort] of; so to speak [say]*

③ 【強化機能】 前言よりさらに一歩進めた陳述をすることを合図する。

*\*above all; actually; as a matter of fact; by no means; in actual fact; indeed; in fact; in particular*

④ 【制限機能】 最小限言えることを合図する。

*\*(or) at least, anyway*

⑤ 【逆接・反対・矛盾・譲歩機能】 逆接・反対・矛盾・譲歩的な内容を述べることを合図する。

*\*all the same; but; even so; however; in any case [event]; mind you; nevertheless; nonetheless; notwithstanding; still; though; yet*

(関連表現)

*\*despite this [that]; in spite of this [that]*

⑥ 【対照】 対照的な内容を述べることを合図する。

*\*on the one hand (formal); on the other hand*

(関連表現)

*\*whereas, while*

⑦ 【比較・類似機能】 比較や同類のことを述べることを合図する。

*\*analogously; by the same token; equally; in comparison; in the same way; likewise; similarly*

⑧ 【一般化機能】 一般化を図ることを合図する。

*\*in all /most /many /some cases; broadly speaking; by and large; in general; on the whole; to a great extent; to some extent*

(関連表現)

*\*apart from; except for...*

⑨ 【論理的・推論の結果機能】 論理的・推論的結論を述べることを合図する。

*\*consequently (formal); so; then; therefore (formal); thus*

(関連表現)

*\*as a consequence; as a logical conclusion; as a result*

⑩ 【訂正・修正機能】

⑩-1 (とちり訂正機能) 非意図的な誤りを訂正することを合図する。

*\*I mean*

*\*excuse me; (I'm) sorry; I beg your pardon (formal)*

⑩-2 (適正語句修正機能) より適切な語句への変更を合図する。

*\*(or) rather*

(関連表現)

*\*(or) I should say; (or) should I say*

*\*let me put it this way*

*\*(or) better; more accurately; more precisely; more specifically*

(関連表現)

*\*to be more precise*

*\*actually; in fact; really*

*\*(or) maybe; (or) perhaps; (or) possibly*

*\*I guess*

(関連表現)

*\*as you were; I take that back*

⑩-3 (制限的修正機能) 前言に対して、その適用範囲や数値的制限を加える。

*\*anyway; (or) at least; well*

I-2 より幅広い文脈と関わって、談話構成を合図する機能

⑪ 【談話開始機能】

⑪ -1 (注意喚起機能) 聞き手の注意を喚起する。

\* *look; say; listen*

\* *ah; eh; hey; huh; oh*

\* *all right [alright (informal)]; now; now then; OK; right; so; well; well then*

⑪ -2 (話題提示機能) 話題を提示する。

\**as for; as regards; regarding; talking [speaking] of [about]; with reference to*

(関連表現)

\**as far as ... is concerned*

⑫ 【談話調整機能】

⑫ -1 (話題順序立て機能) 述べていく順序を合図する。

\**afterwards; finally; first(ly); first and foremost; first of all; for another thing (informal); for a start; for one thing (informal); initially; in the first [second, third] place; last(ly); last but not least; last of all; next; second(ly); then; third(ly), etc.*

(関連表現)

\**to begin [start] with; to open; to stop*

⑫ -2 (話題転換機能) 別の話題を提出する。

\**by the way; incidentally; now; OK; (all) right*

(関連表現)

\**before I forget; just to update you; on a different note; parenthetically; put another way; that [which] reminds me*

⑫ -3 (話題回帰機能) 脱線していた話題を破棄し、主たる話題に戻る。

\**anyhow; anyway, anyways (informal); at any rate; in any case*

(関連表現)

\**as I was saying; back to my original point; leaving that aside; returning to my previous point; to get back to the point; to resume*

⑬ 【談話展開機能】 聞き手にさらなる情報を求める。

\**And?; But?; Because?; So?*

\**For example?; For instance?; Like(how, what, when)?; Namely?; Such as?*

\*Eh?; Huh?; No?; Oh?; What?; Well?; Yeah?; Yes?

\**Meaning (what)?; Which is[was](what)?; Which means [meant](what)?*

⑭ 【談話継続機能】 時間かせぎをして、談話を継続することを合図する。

\* *I don't know; I mean; kind [sort] of; like; let me see; let's see; well; you know, etc.*

⑮ 【談話終結機能】

⑮ -1 (談話要約機能) これまで述べてきたことを要約することを合図する。

\**briefly; in conclusion; in short; in sum,*

(関連表現)

\**to sum up*

⑮ -2 (談話締めくくり機能) 会話全体の終結を合図する。

\**anyway; OK, etc.*

## 2. 情報交換機能

談話標識は、話し手が新情報や旧情報として情報を授受したことを合図する機能を持つ。

⑯ 【情報授受機能】

⑯ -1 (新情報の受容)

\**ah, oh, yes, yeah, etc.*

⑯ -2 (予想外の内容)

\**actually, etc.*

⑯ -3 (情報共有化機能)

\**after all, you know, etc.*

⑰ 【情報焦点化機能】

\**however, like, etc.* (文中に生じる談話標識)

## 3. 態度・感情表明機能

談話標識は、これからどのようなスタンス (態度・感情・様式・確信度・明白性) で陳述するのかを合図する機能を持つ。

⑱ 【評価明示機能】 後続する命題内容に対する話し手の評価を表す

*\*amazingly; amusingly; annoyingly; appropriately; artfully; astonishingly; cleverly; conveniently; cunningly; curiously; delightfully; disappointingly; disturbingly; foolishly; hopefully; ideally; importantly; incredibly; inevitably; ironically; (in)correctly; justifiably; justly; luckily; mercifully; naturally; oddly; predictably; prudently; refreshingly; regretfully; rightfully; sadly; sensibly; shrewdly; significantly; stupidly; surprisingly; suspiciously; thankfully; tragically; (un)luckily; (un)expectedly; (un)fortunately; (un)happily; (un)reasonably; (un)remarkably; understandingly; wisely; wrongly, etc.*

(関連表現)

*\*It was remarkable that... ; What is more remarkable is that... ; That S was remarkable, etc.*

⑱ 【発話様式表示機能】 後続する命題内容に対する発話様式を合図する。

*\*bluntly; briefly; candidly; confidentially; crudely; fairly; frankly; generally; honestly; metaphorically; objectively, personally; precisely; roughly; seriously; simply; strictly; truthfully, etc.*

(関連表現)

*to speak candidly ; roughly speaking ; to be honest ; in all seriousness ; rephrased ; worded plainly ; stated quite simply ; off the record ; quite frankly ; speaking frankly ; though not as frankly as I'd like to ; in the strictest confidence ; to be quite blunt about it, etc.*

⑳ 【確信・明白性明示機能】 後続する命題内容に対する確信度・明白性を合図する。

*\*assuredly; certainly; clearly; conceivably; decidedly; definitely; doubtlessly; evidently; incontestably; incontrovertibly; indeed; indisputably; (most / quite / very) likely; obviously; patently; perhaps; possibly; presumably; seemingly; supposedly; surely; (un)arguably; undeniably; undoubtedly; unquestionably, etc.*

㉑ 【情報出所明示機能】

*\*allegedly, purportedly, reportedly, etc.*

(関連表現)

*I have heard ...; it appears...; it has been claimed...; it is claimed...; it is reported...; it is rumored...; it is said...; one hears...; they allege...; they say...; they tell me..., etc.*

#### 4. 対人関係調整機能

談話標識は、談話の相互作用において、聞き手に対する敬意や思いやりを表す。他方、自らの自己防衛のために、ためらいや控えめな態度を表すことを合図する機能を持つ。



② 【敬意・思いやり機能】

\**If you don't mind; if you like; if you please* (old-fashioned, formal), etc.

(関連表現)

\**If I may interrupt, ...; If it's not too much trouble, ...; Unless I misunderstood you, ...; Unless I'm hearing it correctly, ..., etc.*

③ 【自己防衛機能】

\**I feel; I guess* (American); *I reckon* (informal); *I think*

\**I'm afraid*

\**in my view / opinion* (formal)

\**apparently*

\**so to speak; more or less; sort of* (informal); *kind of* (informal); *well; really; that is to say; at least*

(関連表現)

\**I don't mean to pressure you, but... ; I see your point, but... ; I'm no expert, but... ; I'm sorry to have to ask you this, but... ; That may be true, but... ; You have a point, but... ; You're entitled to your opinion, but..., etc.*